

進歩的教授たちが教職から排除されていくのを見て断念する。

一八四二年五月 『ライン新聞』に政府批判の論説を書き始める。(この年、始めてマルクスとエンゲルスが顔を含わせる)

一八四四年 パリで『独仏年誌』を刊行。「ユダヤ人問題に
よせて」「ヘーゲル法哲学批判序説」を掲載す
る。「経済学・哲学草稿」を執筆。

一八四六年 『ドイツ・イデオロギー』

一八四八年 『共産党宣言』

一八五八年 『経済学批判要綱』

一八六七年 『資本論』第一巻刊行。

一九七一年 『フランスの内乱』を書く。

一九七五年 『ゴータ綱領批判』を書く。

一八八三年三月一日 マルクス死去。二階に駆け上がった

エンゲルスは次のようにペンを走らせたという。

「……ともあれ、人類は頭一つだけ低くなった。しかも人類が今日もついていた頭一つだけ低くなった。しかも人類はどこまでも前進する。けれどもその中心がなくなった。

(略)最後の勝利は疑うべくもない。しかし廻り道、ただでさえさげ得ないこの回り道が……いまや大変多くなるであろう」 大内兵衛『マルクス・エンゲルス小伝』(岩波新書より)

一九八五年 『資本論』第二巻がエンゲルスの手によって

刊行される。

一八九四年 エンゲルス、『資本論』第三巻を刊行する。
一八九五年 八月五日、エンゲルス、ロンドンにて死去。

■橋爪大三郎の本

民主主義はやっぱり

最高の政治制度である

「まだ何か言うべきことが残っているのか。民主主義について、なにか書いたりするたびに、そういう感覚がわいてくる。それでも、こんな本を出すことになったのは、きつと私と同じように出し忘れた宿題を抱えているような、居心地の悪さを感じている人びとがいるのではないかと思うからだ。」

本書「はじめに」より

二〇一二年一月刊 現代書館 一八〇〇円十税

〔講演と対談〕

「認められたい」欲求からみた現代の若者のこころ

山竹伸二 + 小林隆児

小林隆児(司会) 皆さん、どうもお待たせしました。今日は大正大学大学院の講義「臨床心理面接特論」の中の特別企画のゲスト講師として山竹伸二先生をお招きしております。

山竹先生は大学の教員ではなく在野の評論家で、おもに哲学と心理学の領域を専門として著述活動をしておられます。

山竹先生と私が初めて出会ったのは、この一年余り前なのですが、西研さん(哲学者、東京医科大学教授)と一緒に勉強会をしようということになり、西さんから良い人がいるからと紹介されてお会いしたんですね。以来、西研さんと山竹さんと三人で「哲学と臨床を語る会」という勉強会を始めたんです。この会には私にとっては哲学的思考が大変刺激的なんです。お二人にとっては私の臨床経験を語る事が刺激的なようで、お互いに心地よい刺激を受ける会となっています。

山竹先生は、最近立て続けに著書を出版されていますが、私たち臨床心理を学ぶ者にとっていずれも刺激的な本です。

今回はその中でも最新刊『認められたい』の正体(講談社)についてお話をしていただきたいと思ひ、お招きした次第です。それでは山竹先生、よろしくお願ひします。

承認不安の時代

山竹伸二 『認められたい』の正体』は、人はなぜ誰かに認められたいのか、なぜ現代社会では、承認の不安が高まっているのか、といったテーマについて考えたもので、「みとめられたい」という欲望の本質を明らかにしようと思ひて書きました。基本的には現象学という哲学の立場から書かれた本ですが、ここにいるみなさんは臨床心理関係の方々ばかりなので、今日ができるだけそちらの領域を中心にお話できれば、と思ひています。

最初にこの本を執筆するきっかけになったのは、秋葉原の無差別殺傷事件でした。

この衝撃的な事件については、最初は加藤智大被告が派遣先の会社を解雇されたことから、非正規雇用の問題、格差社会の問題として扱われることが多かった。ですが、徐々に彼自身の内面的な問題に焦点が当てられるようになりまし。とりわけ、ネット上での発言に注目が集まり、彼は誰かに認められることを渴望し、自分の存在が否定されることを極度におそれていたのではないかと、承認の不安こそが根本にある問題だったのではないかと、という意見が増えてきたのです。

確かに加藤被告のネットでの発言を読むと、注目を浴びたい、誰かにわかってほしい、という気持ちが伝わってきます。理解してくれる友人も恋人もない寂しさや、モテないことへの恨みつらみなど、読んでいて痛々しいほどですが、それもこれも、誰かに認めてほしい、という承認への欲望として捉えることができるのです。

しかし、彼が承認を求めたネットの住人たちは、無視するか、誹謗中傷の言葉を書き込むだけでした。その後、彼は凶行に及んだわけですが、その最も大きな動機として、「認められたい」という欲望の挫折が考えられるのです。

無論、はっきりとはわかりません。ただ、彼の母親は相当スパルタ教育をしていたらしく、かなり自分勝手なルールを押しつけていたようです。加藤被告が少しでも自分の要求を裏切ると、あからさまに激昂し、理不尽な罰を与えていた、という話もありますし、そうなる、彼が大きな承認不安を抱えていたことは間違いありません。

ミニニケーションのボタンが、現代の若者には見られます。それは非常に強い「承認の不安」を示しているのです。たとえば仲間内のやりとりでも、非常に場の空気を読んで同調してしまう傾向が強い。本当に感じていること、本当に言いたいことがあっても、言う気まずい、言うところの場から外れそうだと、と少しでも感じてしまうと、もうそれが言えない。自分の意見を否定されたり、変な目で見られたりするものが怖くて、思ったとおりのことが言えない、そういう感じが非常に強くなっている。

これは一種の承認ゲームになっているんじゃないかな、と思うんです。つまり、場の空気をうまく読んで相手に合わせていくのがうまい人ほど、その集団の中で認められ、安全なポジションを獲得できるゲーム、承認のポイントが稼げるゲームですね。

でも、そこで得られる承認ってなんなのでしょうか。たとえば、なにか価値のあることをして認められる、というなら分かりますよ。ですけど、いま言ったような例ではですね、なにも価値あることはしていない。ただ相手に同調したり、雰囲気壊さないようにしているだけで、特別に価値ある行為をしているわけではない。そこで私は、こうした内容の交流のことを「空虚な承認ゲーム」と呼んでいます。

なにが空虚かっていうと、承認される対象に価値がないから空虚なんです。道徳的によいことをしたとか、優れた仕事やパフォーマンスをやったのけた、そのことで承認されると

こうした承認の不安は、いまの時代にはとても広がっているように思えます。そしてそれは、さまざまな心の病や犯罪事件の心理的原因になっている。では、なぜこれほど承認の不安が蔓延しているのでしょうか。「現代がミニニケーション重視の社会であるから」という理由を挙げる批評家もいますが、はたしてどうでしょうか。

確かに労働環境を考えてみても、肉体労働や知的労働のよりに、一人で黙々と出来る仕事よりも、ミニニケーションを介した仕事の比重がとて高くなっていますから、ミニニケーション・スキルの高い人間ほど認められやすいのは事実でしょう。ミニニケーション・スキルが低ければ、仕事の能力も低く評価されがちで、非正規の雇用に甘んじざるを得ません。すると、低い収入や社会的立場などの問題から、結婚できる可能性も少なくなるし、そもそもミニニケーションが下手なら、恋愛や友人関係もうまくいきません。

だから、現代の若者が強い承認不安を抱えているのは、高いミニニケーション能力を求められているからだ、という主張も理解できる。少なくとも、現代社会の分析としては、一定、言えているのかもしれない。しかし、やっぱりこの問題を考える上で大事なものは、なぜ人は「認められたい」のか、その意味を考えてみるのだと思います。

若者たちの「空虚な承認ゲーム」

「認められたい」の意味を考える上で、とても興味深いこのうのとちよつと違っています。いわば中身の無い承認ゲームですね。これは先ほど言いました「ミニニケーション・スキルが重視されている」という話とつながっています。なぜかというところ、「空虚な承認ゲーム」では、相手にうまくあわせたい言動をすることで承認が得られるわけですから、ミニニケーション・スキルが高い人ほど承認が維持されるわけです。こうしたことが特に問題になるのは、思春期の子どもたちや青年期の若者です。やっぱり非常に狭い世界の中で生きていますから、その仲間関係から外れるということに、大きな恐怖心があると思います。

いろんな人間関係を持っている人は、ひとつの集団や人間関係がうまくいかなくても、他にも居場所がある、と思うことができますし、大人だと一定それができますよね。だけど子どもたちは、やっぱりまだ世界が狭い。そのため、ちよつとしたことで強い承認の不安に襲われます。それに加えて、家族という居場所が不安定で、親に対して強い承認不安を持っているとしたら、より一層、学校の仲間関係における承認は重要性を帯びてきます。家庭が安定した場所、親の承認もある程度満たされていけば、仲間関係だけに固執しなくても大丈夫かもしれませんが、どちらもダメになつてくると、承認される場が一切なくなつてしまつて、非常に大きな不安になるのです。

まあ、でも大人になつても同じですよ。会社でも「空虚な承認ゲーム」に近いミニニケーションは結構多いと思

ます。本来、職場は仕事の内容でその価値を承認し合う場所のはずですが、なかなかそう単純でもない。ですから、大抵の人はどこかで「空虚な承認ゲーム」を経験しています。ただ、子どもはまだ自分に自信がなく、身近な人々の承認がとて大きな意味を持つため、一度こうしたゲームに加わってしまうと、なかなか脱け出せないのです。

「空虚な承認ゲーム」では、たとえ承認が満たされていても不安があり、苦しさがあります。なぜでしょうか？ たたえ内容が空虚でも、コミュニケーションさえうまくやれば認められるのだし、そうやって承認が維持されてさえいれば、苦しくないはずではないでしょうか？

理由はふたつ考えられます。ひとつは、承認される行為の内容が空虚であるため、自分でもそこに価値があると感じられない、ということがあります。価値のある行為が認められているのであれば、自分でも承認されるのは当然だと思えるでしょうけど、「空虚な承認ゲーム」では、そうは思えない。認められる根拠が自分でもはっきりしないのです。だから、いつ相手の承認が批判に転じるかもしれない、という不安がつねにつきまといまいます。

もうひとつ、もっと重要なことがあります。認められるためとはいっても、周囲の言動にばかり調子を合わせていければ、本当はこうしたい、こう考えている、という本音を必要以上に抑圧しなければならなくなる。これは要するに、自由にふるまいたい、という欲望を抑圧しているわけです。だから、

なりません。人間は認められたい存在だ、ということを自明なものと思わず、一体それがなにを意味しているのか、そこから考えはじめるべきだと思うのです。

「認められたい」の現象学

意味を考えると、できるだけ多くの人が共通して認められるような意味、共通理解ができる意味を考えるわけですが、これは「本質」と呼ぶことができます。本質を考えることは、これまで哲学の中心的な営みでした。プラトンのイデア論も本質を問題にしているし、カントやヘーゲルの哲学も本質論として優れている。ニーチェもハイデガーもそうですね。本質をうまく取り出せているかどうか、優れた哲学のメルクマールなのです。

こうした本質の洞察について、もともと自覚的に方法論を練り上げたのが、フッサールの現象学でした。それは本質を取り出すことの意義と方法を、非常に明確にしています。私も現象学の考え方をはじめて知ったときは、眼から鱗が落ちるほど驚き、衝撃を受けました。

いま、フッサール現象学やカント、ヘーゲルらの近代哲学に対して、厳しい批判が出ています。フランスのポストモダン思想、それから英米の分析哲学もそうですね。理性主義への批判、観念論的方法、つまり主観性や意識に焦点を当てた思考法への批判など、まあいろいろありますが、ここで重要なのは真理主義への批判です。現代の哲学は、近代哲学や現

たとえ周囲の承認が得られても、自己不全感が生じて苦しくなる。それは、「偽りの自分」を演じているような息苦しさです。しかし、自由に言いたいことを言い、やりたいようにやってみよう、まわりから批判されたり、白い眼で見られたりして、承認を失ってしまうかもしれない。自由のほうを大事にして、他人がどう見ようと思おうと知ったことじゃない、と思う人もいますが、大抵の人は承認を守るために、ある程度は自由を抑制するものです。

こうした「自由と承認の葛藤」は、なにも「空虚な承認ゲーム」にだけ生じるものではありません。現代社会に生きている私たちの誰もが、多かれ少なかれ、この葛藤を抱えて生きています。もつと言えば、近代以降、自由に生きるための可能性が生まれたときから、私たち人間の心のなかには、つねに「自由と承認の葛藤」があったと思います。自由に行動できるからこそ、その行動が周囲の承認を得られるのかどうか、という問題にぶつかりますから。そしていまの社会は、これまでで最も自由に生きる可能性が広がっています。ところが、承認不安もいまままで一番広がった社会なんです。そこで、自由が広がれば、それだけ承認不安は強くなるのか、という疑問が出てきます。はたして本当にそうなのでしょうか。自由と承認は両立しないのでしょうか。

この問いについて、私は「自由と承認は両立し得る」と考えているのですが、なぜそう言えるのかについては、そもそも人はなぜ認められたいのか、その意味を考えてみなければ象学が求めてきた普遍的な原理、本質、といったものを、真理の存在を肯定するものとして批判しているのです。

でも、こうした批判は見当違いなものだと思います。確かに絶対的な真理など存在しませんし、それはそのとおりなのですが、現象学や近代哲学が求めてきた本質とは、多くの人々が共通して認めるような意味であって、絶対不変の真理などではないのです。

それは、大勢の人が「なるほど、確かにそうだな」と共通理解ができる意味のことです。現象学には、こうした本質を取り出すための優れた思考方法があって、「本質観取」と呼ばれたりしていますが、この方法は、「認められたい」という欲望の本質を考える上でとても有効です。

手順としては、まずさまざまな承認の経験を想像してみます。親にほめられたことや、職場で仕事を評価されたこと。人助けをして感謝されたこと。独創的な作品で周囲に賞賛されたこと。いろんな経験が思い浮かぶわけですが、それらを比較検討し、何度も熟考を重ねていくと、承認の経験に共通する構造が浮かび上がってきます。そして、それを多くの人「なるほど、確かに！」と思えるようなところまで言葉を練り上げ、これらの経験の意味をうまく言い当てることでできたなら、それが承認欲望の本質だと言えるのです。

承認が満たされる三つの経験

さて、そんなふうに進めてみた結果、承認が満たされ

る経験は大きく三つに分けられる、と私は確信するようになりました。その三つの違いは、他者との関係性の違いによって分けることができます。親密な関係だったり、単に仕事上の関係だったり、自分にとってどのような関係にある他者なのか、その人たちがどのような承認を与えてくれるのか。そう考えていくと、三つの異なった他者との関係が浮かび上がってきたのです。

まずひとつは、愛と信頼の関係にある他者で、私は「親和的他者」と呼んでいます。家族とか恋人、親友などがそうですね。

こういう人たちは、「ありのままの私」を認めてくれる存在なんです。先ほど、価値のあることをして承認される、というような話をしましたけど、こういう親密な関係にある人たちは、別に価値あることをしなくても受け入れてくれるのです。これは、なにか価値あることをして承認されるような「条件付きの承認」ではなくて、いわば「無条件の承認」に近いものです。こうした親和的他者の承認を「親和的承認」と呼んでおくことにしましょう。

次に、自分が属している集団の人々がいますね。学校、職場、サークル、趣味の仲間、あるいは宗教団体なども含まれますが、そういう集団では一定の目的や価値が共有されていますし、自分も一定の役割を担っていることが多いと思います。ですから、そうした役割を遂行して集団に貢献したり、共通の目的や価値観に準じた行動をすることで、「おお、よく

一般的他者なのです。

それは自分の意識のなかで表象された他者の一般像みたいなものですが、でもわれわれは周囲から認められないとき、そういう形で承認の欲望を満たそうとする。これは、具体的に誰かに承認されるというよりも自己承認と言えますね。自分で承認している。

でも「俺がいいと思うんだから、いいんだ」「誰がなんと言おうと価値があるんだ」というような、自分勝手に自己承認することでありません。誰もが認めるだけの価値ある行為かどうか、よくよく考えた上での自己承認であり、そこでは必ず他者の承認を想定しているのです。

こういう内省をとおした自己承認を、私は「一般的承認」と呼びますが、それは人間にとっても大事なものだと思えます。こういうものがないとすね、やつぱりどうしても身近な人に対して強い承認不安を持つようになる。でも、周囲の人々がわかってくれない、と思っても、他者一般の承認を自分の中で想定し、確信できるなら、ある程度まで承認の不安を払拭することができる。自分を信じることができるので、周囲に流されたり、同調しすぎるようなこともないので。

一般的他者を想像し、承認されるかどうかを考える視点を、「一般的他者の視点」と呼ぶことにしましょう。それは大抵の人がある程度は持っている視点で、よほど歪んだ生育環境にないかぎり、小さい頃から少しずつ形成されてくるも

やった」「さすがだね」「すごい」というような承認を得ることができず。学校で優秀な成績をとることや、職場で業績を上げることが典型的ですね。野球部で勝利に貢献したり、吹奏楽部でいい演奏をした場合もそうでしょう。

このような関係にある集団の人々のことを「集団的他者」、そしてこうした承認を「集団的承認」と呼んでいます。これは親和的承認とは違って、その集団の人々にとって価値あることをしなければ与えられません。無条件には与えられないのです。

このように、承認を与えてくれる身近な人たちは、親和的他者と集団的他者に分けることができますけど、もうひとつ、見知らぬ一般の人々もまた、承認を与えてくれる対象となることがあります。それは特定の誰かというわけではなく、想像上の人たちでもあるわけですが、私はこれを「一般的他者」と呼んでいます。

たとえば、なにか価値あることをした、と自分で思ったときに、でも自分の属する集団の人たちは認めてくれなかった、なんてことがありますよね。「俺のやったことは価値あるはずなのに、なぜこいつらは認めないんだ」と思ったときに、頭の中で他のいろいろな人間を思い描き、彼らが自分の行為を認めるかどうか、考えてみる場合があるでしょう。このとき、「普通は誰もがみんな認めてくれるはずだ」とか「きっと別の場所へ行けば、俺のやったことは評価されるだろう」などと確信するかもしれない。この場合の「みんな」というのが

のです。

といっても、実際には、「一般的他者の視点」の弱い人もたくさんいるし、ほとんど持ち合わせていない人もいます。特にいまの社会では、こうした視点で物事を考えること自体、難しくなっているのかもしれない。それがなぜなのか、ということについては、また後で詳しく説明しましょう。

ところで、集団的承認も一般的承認も「価値ある行為に対する承認」という意味では一緒ですけど、身近にいる具体的な誰かが対象となる集団的承認と、見知らぬ一般の人々の対象が対象となる一般的承認では、随分違うことがわかんと思えます。それに一般的承認の方が、より一般性、普遍性のある価値を志向しています。集団的承認は、その集団に共有された価値ですから、必ずしも普遍性はありません。

Aニメのサークルなどでは、あるアニメ作品やキャラクターに異様な価値を認めている人たちがいて、お互いの趣味や感性を認め合えるでしょうけど、その集団から一歩外へ出ると、もう誰も認めてくれないかもしれない。でも一般的承認はそうじゃない。それは価値観の違う集団の垣根を越えて、誰もが承認するような普遍性のある価値を求めるからです。典型的なのは道徳的行為ですね。たとえば、Aニメの好きな人であろうと、プロレスの好きな人であろうと、人を助けることには価値がある、と思っています。思っていない人もいるかもしれませんが、一般性の高い価値であることは間違いないでしょう。

以上が、親和的承認、集団的承認、一般的承認という三つの承認の概略ですが、次にです、われわれは一体どのようなにして「人に認められたい」と思うようになるのか、承認への欲望はなぜ三つの異なったタイプがあるのか、承認欲望の発生という問題を考えてみたいと思います。

欲望の発生論的考察

そもそも人間が求めるよろこびは、これも現象学的に考えてみると、おおよそ三つくらいに分けられると思います。

まず「身体的なよろこび」。自由に身体を動かすことや抱っこされること、眠れること、スポーツを楽しむこと、おいしいものを食べるなど、いろんな身体的なよろこびが思い浮かびますね。二つめは「関係的なよろこび」。親子関係や友情関係、恋愛関係、あるいは職場やサークルでの関係などもそうですが、関係そのものによるよろこびを感じることは多いでしょう。三つめが「承認のよろこび」で、これは結局、自分の存在が肯定されるよろこびでもあります。

こうしたよろこびを求めることには、一方で、それが実現しないこと、むしろそのよろこびが失われてしまうことへの不安がつきまとっています。

たとえば「身体的なよろこび」を失う不安には、死への不安、病気の不安、事故への不安など、身体的な危機に陥ることへの不安がともなっている。「関係的なよろこび」を失う不安は、家族との死別、失恋、自分の属していたグループが着している身体的心地よさもあるのですが、それが段々、母親との「関係的なよろこび」になっていく。母親との関係そのものによるよろこびを見出すようになっていく。乳幼児を経過観察した研究の多くがそのことを示しています。

私も自分の子どもが授乳する様子を見ていて、徐々に変化していくことに気がつきました。単に空腹を満たすというよりも、母親の身体のうちを触りはじめたり、遊んだり、母親の目を見ながら授乳するようになっていきましたからね。それで「関係的なよろこび」が出てきたな、と分かるわけですが、これは「親和的承認のよろこび」にも関わっています。自分がただ存在するだけで母親によるこぼれている、そう感じるようになるのです。

一歳くらいになると、今度はルールを介した「関係的なよろこび」が生まれてきます。これはルールを守る必要性が出てくるので、当然といえば当然です。段々いつまでも甘えてはいられなくて、親の要求や期待がたくさん向けられるようになるのですから。

一歳になって特にそういう傾向が強くなるのは、子どもがハイハイするようになったり、歩けるようになるからです。それまでは自由に動けないわけですから、たいして悪さもできなかつたのですが、自由に動きまわれるようになって、手当たり次第に物を散らかし、壊したり、口の中に入れてたりするわけです。「もうダメよ、ダメ！」っていうふうには母親がうるさく言っても、なかなかやめません。

バラバラになってしまうこと、友人と離れ離れになること、仲間割れしてしまうこと、などなどです。最後が承認の不安。これは批判されたり、中傷や非難を浴びたり、白い目で見られたり、そういう不安です。

承認不安というのは、自分の存在価値が否定され、失われることへの不安、と言うこともできるでしょう。承認されないということとは、自分がこの世に必要とされていない、と感じることですから、生きている意味も感じられなくなってしまう。でも誰かに自分の存在や行為を認めてもらえれば、自分の存在価値、生きる意味を感じることができ。人はなぜ認められたいのかといえば、それは結局、自分の存在価値や生の意味に深く関わっているからです。

発生の順序としては、まず「身体的なよろこび」から「関係的なよろこび」が出てきて、そこから段々、自己の存在価値に対する「承認のよろこび」が生まれてくる、というふうになっています。承認のよろこびも、最初は「親和的承認のよろこび」だけがあり、次第に「集団的承認のよろこび」がめばえ、最後に「一般的承認のよろこび」というものが出てきます。

「無条件の承認」は失われたか？

赤ちゃんは最初、「身体的なよろこび」だけを求めていますよね。眠っている心地よさ、おっぱいを飲んでる心地よさ。授乳は単にお腹が満たされるということじゃなく、母親と密着して、食事もそうです。離乳食になってご飯を食べるようになると、食べ散らかすわ、ぐちゃぐちゃ手づかみするわ、もう大変です。それで、食べるときはこうしなきゃいけない、と言われるようになります。もうちょっと後になるとトイレ・トレーニングもはじまりますが、これは最もルールを象徴する行為です。トイレができるようになるということは、一定の訓練が必要になってきますからね。そういうふうには、段々いろいろな要求をされるようになるのです。

こうした過程のなかで、少しずつ、ルールが意識されるようになってきます。ルールを守るとほめられ、なんか嬉しい。ここに新しい関係のよろこび、承認のよろこびも生まれます。でも一方では、なんでも許されるわけではなく、なにかすくて、不満も感じるようになります。ちよつとなにかすると、すぐにやめさせられたり、怒られたりする。なにをしても母親はここにこしてくる、ということはなくなくなってきます。子どもにとつてそれは、「無条件の承認」が失われるような経験といえるでしょう。

といつても、それは子どもの側から見てそういう感じがするってことです。親の方は別に、その条件をクリアしなければ愛さないぞ、認めないぞ、というふうには思っていないわけではあります。いろいろできるようなならないと、この子が将来困るから、あるいは危険な物を触ったり、口に入れたら危ないから、というような親心から行動を制止しているのです。しかし子どもからすれば、段々「あれもダメ」

「これもダメ」と言われている気がして、うんざりします。そうするとですね、ちょっと反抗するようになってくるんですよ。一歳半くらいはじまる第一次反抗期というのは、こういう意味を持っていると思います。

でもですね、新しいことができるようになったり、ルールを守ったとき、「あ、できたね、いいこね」と言われるよろこびも、どんどん大きなものになっていきます。親和的承認のように、「ありのままの自分」が無条件に承認されるよろこびではなく、なにか価値あることをして、それに対する評価として賞賛されるわけですから、集団的承認や一般的承認の原初的な体験と言えるでしょうね。

それは、ルールを取り入れるための大きな動機となりますが、しかし、ほめてくれるのが嬉しいからと言って、そういう簡単には親の言うことを聞きません。一見非常に気まぐれに見えるほどルールを守ったかと思えば、わざとルールを破っていると思えないう、ということを何度も繰り返します。こうした反抗は、まるで「なにをしても私を受け入れろ」と言っているかのように見えるものです。実際、「無条件の承認」を取り戻そうとしているのかもしれないですね。

価値ある行為の意識

しかし、段々「集団的承認のよろこび」を求める気持ちが大きくなっていきます。

特に保育園や幼稚園などに行くと、家よりもルールは厳し性があると思うのです。

やっぱり子どもが本当に成熟していくためには、反抗期的な、遊びの時期みたいなものがあると思います。ですから幼児期において、「集団的承認のよろこび」を求めるようになると同時に、反抗的な態度やルール破りもあつたりするのは、とても健全な証だと思えます。そうすることで少しずつ、もし自分ができなくても、親はちゃんと受け入れてくれるはず、と信じられるようになり、そうした安心感のなかでルールを身につけていくわけです。

小学生くらいになると、もっと集団的承認への欲望は強くなります。親から少し離れ、友だち関係のなかだけで遊ぶことが増えてきますから、そこでの承認がとても重要になってくるのです。お互い秘密を持ったり、自分たちでルールを作り上げ、それを守ることで仲間として承認しあうような世界ができてきます。

そこから段々と、友だち関係で共有されたルールや価値を超えた、より一般性のある価値やルールも意識されるようになるのです。それは、自分の行為に誰もが価値を認めるかどうか、という「一般的他者の視点」が形成されることにほかなりません。

たとえば、仲間内では正しくても、社会的には悪い行為という場合があります。仲間の掟を破れば無視したり、悪口を言ったり、いじめになることだってあります。しかし「一般的他者の視点」があれば、これはやっぱりおかしいぞ、他の

いし、他の子どもたちも一緒にルールを守っているので、守らざるを得なくなる。それに、保育園の先生や友だちに対して求めているものは、親に求めているものとは違いますが、誰にでも甘えられるとも思っています。そして、保育園や幼稚園のなかで、「わあ絵が上手だね」とか「お食事、ちゃんとマナーを守ってやれたね」とか、「うんちもちゃんとトイレでできたね」とか、いろんなことが集団的承認の対象になり、それが段々よろこべるようになってくる。

よろこべるようにならないと、まずいなと思うんですよ。よろこびよりも不安のほうでルールを取り込む動機として強ければ、非常に病理的な問題を抱え込むことになるだろうと思います。

たとえば、世間に誇れるような非常に優れた子にしようと思つて、早くから厳しいルールや高い水準の要求を押しつけ、期待に沿わないと厳しく叱責したり、絶対に許さないという態度を示していると、親に見捨てられたくない、という不安から早くルールを覚えるかもしれない。すると、傍目には非常「いい子」に見えるんですよ。「この子、ちゃんとできるからいいねえ」とまわりの人間は言い、親も自慢の子みたいな感じになっている。でも、本人は自分の感情を過度に抑圧したせいで、自己不全感の苦しみを抱え、いつも親子関係に不安を感じている。だから、どこかで無理がきて、抑うつ状態になったり、親に罵声や恨み言をぶつけるようになったり、身体的な不調が生じたり、いろんなことが起こってくる可能

人が知つたら許さないぞ、と判断できるようになる。でもそういう視点は、思春期ぐらいではまだとても未熟です。そのため、仲間との関係も「空虚な承認ゲーム」になりやすく、自分を抑え、同調しがちになってしまいます。そしてそのコミュニケーションに失敗し、仲間との関係に齟齬が生じれば、家にひきこもってしまうのです。

まあ、なかには自分で仲間に見切りをつけ、自分で勝手に「俺が正しいんだ」と思い込む人もいます。これは「一般的他者の視点」から正しさを確信しているのではないので、まったく自己中心的な自己承認です。これも思春期から青年期にかけて生じやすい心理ですが、いまの時代にはそんなに多くないかもしれませんね。どちらかと言えば自信がなく、周囲に同調してしまう人のほうが多いでしょう。だからひきこもりも増えている。

「一般的他者の視点」から物事を考えられるようになるには、まず、できるだけいろんな人々と接するようにしたほうがいいし、テレビや本などを介して、多様な人々、多様な価値観を知ったほうがいい。同じ人たちとはかり接していると、別の観点が入ってこないし、一般性、普遍性を考える力が身につかない。

価値観や考え方、感性、社会的立場、利害などが異なつていても、客観的に考えれば誰もが納得し、共通理解できるような普遍性のある価値判断。「一般的他者の視点」が形成されれば、それがある程度は可能になります。一般的承認を想定

し、自分なりに納得のいく価値判断ができるようになるのである。

相補的關係にある三つの承認

さて、こんな具合にして、親和的承認、集团的承認、一般的承認のよろこびを知るようになり、それぞれ求められるようになるのですが、この三つの承認は相補的な関係にあります。ある承認が満たされなくとも、別の承認がその不満を補い、埋め合わせをする可能性があるので。

たとえば、親和的承認に恵まれない人がいたとしますよね。家族からは愛されなかった、恋人もいない、友人も親友と呼べるほどではない、という状態だと、親和的承認については非常に不安を抱えている。でも、勉強でいい成績をとったり、なにかのスポーツをがんばって優勝したりすれば、集团的承認を得ることはできる。努力と才能次第で、周囲から称賛される道は残されているのです。また、仕事やサークルで仲間と協力したり、路上で人助けをしたり、そんなちよつとした価値ある行為でも、周囲は認めてくれるでしょう。親和的承認は努力次第というわけにはいきませんが、集团的承認はそうではない。だから親和的承認の欠乏感を補う可能性があるのです。

では、集团的承認もダメだったらどうでしょうか。がんばったし、価値あることをやったはずなのに、まわりの連中は認めてくれなかった、という場合です。

された状況でないかぎり、まったく全部の承認がなくなることは、そうそうないだろうと思います。

承認不安の生み出す心の病

さて、次にですね、認められないことへの不安が生み出す行動や考え方の歪み、そして心の病についてお話しようと思います。

自分の行為や作品が批判されたり、家族に「ありのままの自分」を受け入れてもらえないなど、承認の不安が高まると、自分の存在価値が低下し、失われてしまうような気がします。それは「生きる意味」を見失うことでもありますから、とても大きな苦しみになるでしょう。

実際に誰かに批判されたり、ひどいときは存在を否定され、ひどく落ち込んだり、絶望的な思いをした経験があるなら、その後の人生において、つねに承認の不安がつきまとうかもしれない。不安が強すぎて行動できなくなったり、パニックに陥ったりすることもあるかもしれない。

また、人間は不安が生じたとき、なんとか不安を避けようとするものです。不安を感じている状況を避けるために、こうしなければならぬ、こうしたらなんとかなるかもしれない、というような不安回避の心理が働き、承認不安に対する防衛的な行動を起こします。不安をふり払おうとして、不合理な行動を強迫的に繰り返してしまう場合もあるでしょう。不合理な行動ではなく、適切な不安回避の行動であれば別に

このときは、一般的承認が役に立つんですね。周囲は理解してくれないが、「一般的他者の視点」で考えてみると、やはり自分のやったことには価値がある、普通は誰もが認めるはずだ、と確信できたなら、不安を乗り越えることができる。

無論、集团的承認や親和的承認のように、実際に称賛されたり、やさしく包まれたりするような嬉しさはないのですが、承認が得られない苦しさを一時的に耐えることはできるので。

でも人間は弱いから、ずっと一般的承認を確信するだけでは生きていけません。一人でもいいので、誰かに実際に認められないと、やはりとても苦しくなる。それに、いつでも価値あることをしている、と確信できるわけではないでしょう。たとえば、周囲の称賛を受けていたサッカー選手が、ある日、ケガをして二度とサッカーができなくなり、ど大人が離れてしまったとしたら、集团的承認を得ることはおろか、一般的承認の想定さえできず、自分の存在価値がどんどん落ちていくような気がするにちがいません。このときに、そんな自分でも受け入れ、愛情を注いでくれるような存在がいたとすれば、その親和的承認は大きな救いになるはずですよ。

大体こんなふうに、親和的承認、集团的承認、一般的承認は相補い合う関係にあり、そのバランスがうまくとれていると、承認不安を乗り越えることができるわけです。どの承認もないとなると、ちよつと辛いですけど、集团的承認と一般的承認は努力次第というところがあるので、よほど行動が制限

病気とはいえませんが、その行動や考え方がどうみても歪んでいる、ということになると、心の病と呼ばれます。

たとえば、人に醜いと思われる不安から過激なダイエットを繰り返したり、摂食障害になってしまう人がいます。実際には結構綺麗な人だったりするのに、自分の身体像が非常に歪んだものになっていて、そういう行動に駆られてしまうのです。あるいは、批判や軽蔑を受ける不安から、自分が発言せねばならない場所を避ける人もいますが、これが人のいる場所であればどこであれ不安の対象となり、一切外出ができなくなる、ひきこもった状態になる、ということになると、やつぱり病気と言われますよね。これも適切な不安回避の行動を超えて、歪んだ行為になっています。

こういう歪んだ不安回避の行動を長年に渡って繰り返していると、それはその人の行動パターンや考え方のものになってしまいます。

誰でもいろんな不安を経験し、その都度それを避けようとするなかで、「こういう不安のときにはこうする」というような、不安に対処する自分固有のルールを身につけるものです。歪んだ不安の対処法、不合理な不安回避行動を繰り返していると、そうしたルール、自己ルールと呼んでおきますが、これが歪んだものになってしまうのです。

普通、自己ルールは親子関係のなかで原型ができますから、歪んだ親子関係の中では、歪んだルールが身につくやすいためです。なぜかという、誰でも親に愛され、認められるた

めに、親の要求や期待、価値観を取り込むわけですが、その要求や期待が世間一般の常識からすると過大なものであったり、歪んだ内容だったりすれば、当然、歪んだ自己ルールや考え方が形成されるからです。そして、その歪んだ行動によって自分を苦しめる結果になるでしょう。

うつ病の例で説明してみましようか。

うつ病の人は几帳面で生真面目な人が多く、対人配慮もできるし、働き者である、と昔から言われてきました。テレンパツハはこれを「メラニコリー親和型」と呼んでいます。では、なぜこのような性格が形成されたのか。おそらくそれは、そうしなければ承認されない、という経験から身についたものでしょう。人の何倍も働き続け、非常に細かいところまで配慮し続けたいと、ちゃんと受け入れてもらえないんじゃないか、という不安を、親との関係のなかで身につけてしまったのです。でもそうした行動を続けるのはとてもしんどいし、次第に疲れて、思うようにできなくなってくる。そして、もうだめだと諦め、絶望してしまい、抑うつ状態になるのです。

承認不安から脱け出す方法

まあ、こんなふうには承認不安から生じる病理的な問題を考えることができるのですが、では、こうした承認不安から脱け出し、歪んだ考えや行動を修正するには、一体どのようなすればよいのでしょうか。

てみると、なかなか自分の持っている歪みを自覚することができません。どのような行為にしたほうがいいのか、その方向性も見出せないでしょう。

単に世間の常識に合わせて歪みを直す、というのでは十分に納得できないし、場合によって、周囲に同調するだけになってしまいかもしれない。だけど、深く納得した上で自分の行為を決めることができるなら、そこには自分の意志で行動している、という自由の意識がもたらされるはずなのです。

なぜ、いま承認不安の時代なのか？

さて、承認不安のもたらす苦しみについて、いろいろお話ししてきたわけですが、最後に、なぜいま承認不安の時代なのか、ということについて、簡単に触れて終わりたいと思います。

まず、私は承認不安が強くなったのは近代以降だと考えています。

近代以前の西欧社会はキリスト教の価値観が非常に強い社会だったので、教会の決めたルールとか、伝統的な価値観に従って行動するしかありませんでした。生まれたときから職業も決まっているし、社会の価値観に反する行動は絶対に許されないので、自由はないも同然でした。ただし、承認不安はあまりなかったと考えられます。なぜかという点、社会の価値観やルールに従っているかぎり、その行為は必ず認められるわけですから、それに自由の意識ももてていないので、

ひとつは自己了解がとても大事だと思います。不安の内容に気づくことです。承認不安が原因で歪んだ行動・ルールを身につけているとしたら、まず承認不安に気づかないと、歪んだ行動を変えることはできません。

承認不安に気づくことができれば、この不安があるから私はいつもこうしなければならぬ、という強迫感を持つていたんだな、そういうルールを作り上げ、行動パターンになっているんだな、と理解することができまます。そして自己ルールの歪みを自覚すれば、少しずつそれを修正することもできるようになります。

この場合、過大な承認不安や歪んだ自己ルールの原因を、過去にさかのぼって自己分析することも有効になるでしょう。自分の行動に歪みがあると気づいても、なぜそのように歪んでしまったのか、その理由を知ることができないと、なかなか深い納得感を得られないし、自己ルールを直すのも簡単ではありません。小さい頃、そうしなければ親に受け入れてもらえなかった、だからこんな考えや行動が身につけてしまった、というふうには自覚できれば、ずいぶんと違ってくるはず

です。

最後にもうひとつ、「一般的他者の視点」から内省することも、承認不安から脱け出すにはとても大きいように思います。これは小さい頃から徐々に成熟してくるもので、個人差も大きいので、簡単ではありません。しかし、自分の行為を見直し、自己ルールを修正する上で、この視点から考え直し

社会の価値観に対する抵抗もあまりなかったでしょうね。ですが、近代になると宗教的な価値観への信仰が徐々に崩れていくことになりました。

まず自然科学や啓蒙思想が登場して、宗教の抱える不合理な物語性に疑問が向けられるようになりました。また、資本主義が発展して産業構造が変化し、それまでは農村で働く人がほとんどだったのに、みんな農村を捨てて都市へ出ていきました。そうすると、新しい人間関係のなかで、新しいライフスタイルで生きていくことになりましたから、地域に根づいていた伝統的な価値観への信頼は徐々に崩れていくことになったのです。

こうなると、従来の生き方が見直され、新しい生き方を模索する人が出はじめました。しかも、フランス革命などの市民革命の影響もあって、自由の理念が広まりつつあったわけですし、経済的にも段々豊かになってきて、自由に生きるための条件も整ってくる。そうやって、だんだん伝統的な価値観の縛りから脱け出し、自由に生きようとする人々が増えていったわけですね。

もちろん、近代になってもしばらくの間は、まだまだ伝統的価値観の影響力が強かったわけですから、最初は自由に生きようとはじめた人々も社会の価値観とぶつかり、葛藤するようになりました。個々人の心のなかで、自己の自由と社会の承認が激しく葛藤するようになったのです。

ですが、こうした社会共通の価値観もだんだん壊れはじめ、

いまでは絶対的な影響力のある価値観など存在しなくなり、価値相対主義の時代に入っています。ですから、社会の価値観と個人の自由が対立する、という図式は、もうほとんど存在しないような気がします。まあ、それだけ特定の価値観に縛られず、自由に生きる可能性が大きくなっている、ということでしょうね。

しかしそうなる新しい問題が生じます。かつては社会共通の価値観に沿って行動していれば、必ず承認を維持することができました。それは承認されるための絶対的なマニュアルだったので、迷う必要もなかったし、承認不安もありませんでした。でも、いまや社会共通の価値観は大きくゆらぎ、価値観も多様化の一途を辿っています。それはつまり、承認を得るためのマニュアルがたくさん生まれ、それを信じていいのかよくわからない状態になったのです。

それでも誰かに認められないと、自分の存在価値があやふやになり、非常に大きな承認不安に襲われてしまいます。その結果、新興宗教や自己啓発のような手頃なマニュアルに頼ったり、「空虚な承認ゲーム」から脱け出せなくなったりするのは、それが、「社会の承認」よりも「身近な人々の承認」のほうが重要になっていて、ということだろうと思います。「空虚な承認ゲーム」はその典型ですが、新興宗教にはまる人でも、身近な宗教仲間の承認が大きな動機になっている。現代が承認不安の時代と言えるのは、こうした事情からなのです。

代から現代に至る過程で、この様々な枠組みがどんどん崩壊していき、とても自由になったのだけれども、自由になっていく中で、承認不安というものが非常に現実的な問題として浮上してきた。そういう視点に立つて、自分の臨床経験を振り返ってみると、まさにそういうクライエントさんがとても多いことに気付きます。また、大学の学生さんたちと接しているのも、彼らが卒論で選ぶテーマを見てみると、承認に関する問題と繋がっているものが多いんですね。彼らも現実的にそういった壁にぶち当たっているんです。そういう意味で、承認不安という視点は、現代の若者を理解する上で、非常に重要な鍵になるのではないかと私は思ったんです。いま山竹さんが提案されている、親和的承認、集団的承認、一般的承認という話をお聞きして、親和的承認というのは、まさに「甘え」の世界の問題でもあるんですね。私たちが日頃接するクライエントさんを見てみると、親和的承認の問題をずっと抱え込んだ形で今日まで来ている人が大半なんです。集団的承認というのを見て行くと、親和的承認を体験できなかったが故に、それに代わって集団的承認を追い求めている姿を若者の中に強く感じるんです。青年期のケースを見るとそのことがとてもよくわかるんですね。したがってこの承認不安という視点は、今日の若者の精神病理を理解する上で、非常に大切な視点ではないかと思うんです。

ひとつお尋ねしたいのですが、親和的承認が幼少期にうまく体験出来なかった人達に対して、山竹さんは、集団的承認

でも私の考えでは、社会共通の価値観が完全になくなり、一般的承認も成り立たない時代になった、とまでは言えないと思います。たとえば感性や価値観の異なる人でも、困っている人を助けることは、誰もがよいことだと言うはずですが、こうした道徳的行為の価値が典型的ですが、多くの人々が共通理解できるような価値というものは存在する。だから「一般的他者の視点」も成り立つし、一般的承認の可能性だって十分にある。だから、そう悲観することもありません。承認不安を脱け出す道は必ずあるのですから。

【対談】

親和的承認の希薄な若者たちと「甘え」

小林 山竹さん、ありがとうございます。ではこれから対談に移りたいと思います。山竹さんは心理臨床畑の方じゃないのですが、現象学という立場から、様々な心理面の病理現象に対してアプローチしていらつしやるんですね。私はそこに魅力を感じているんですね。中世から近代に至る過程で、人間は様々な暮らしの中で自由を獲得していったんですね。それまでの社会制度の中では、そのような自由はなくて、生まれた時から一生、すでに決められた枠組みの中で生きてきた。その中で承認を得ることができれば、それなりに生きていけていた、そういった時代だったんですね。でも今は、近

とか一般的承認とか、自己分析をする中で、自己了解、あるいは内省という作業を通して、その承認不安から脱出していくと提案されているんですが、今日、臨床で問題となっている人たちを見ると、この親和的承認の体験が非常に希薄だった人達が圧倒的に多いんじゃないかと思うんです。そういう人達が承認不安からどう脱出していかを考えると、この親和的承認の体験の問題には自分の力だけでなかなか気づくことはできないんですね。親和的承認の体験というものはそういう性質のものだろうと思うんです。したがって、自己了解という作業は大変難しいだろうし、そういう場合に、どういふふうな角度から承認の問題に近づいて行ったら良いのか、そのあたりのことについて、まずお尋ねしたいと思います。

山竹 確かに、一口に自己了解といっても、なかなか難しいのはそのとおりです。例えば、承認不安が原因で自分の行動が歪んでいると頭では分っても、それを変えることはなかなか難しい。なぜなら、その行動だけが不安を解消する唯一の方法だと思いついてきたんですから、その行動をやめるのはとても怖いことだと思います。だから、その行動をやめても大丈夫なんだ、それでいいんだ、と思わせてくれるような誰が必要になります。それは、親和的承認を与えてくれるような誰かですね。軽い承認不安なら自分だけで自己了解できるかもしれないんですけど、深い問題にはなかなかできない、やっぱり誰かの助力が必要ということになります。家族や親友、恋人がそういう役割をはたせる場合もありますが、カウンセ

ラーでもいいかもしれせんね。そういう人たちが、「あなたはそうしなければ受け入れられないと思ってるかもしれないけれど、そうじゃなくても大丈夫。私はすでに受け入れますよ」という感触を与えていくことが、結構大事になると思います。

ただ、直接そう言うのではなくて、接し方のなかで伝わることが重要です。「あなたは実はこういう承認不安があるんじゃないですか」と言ったときに、その解釈がその人に気づかせたというよりも、その言い方や、その接し方の中で、「ああ、この人は自分の、そうじゃなくても良いっていうふうに感じてくれているんだって」ということが、実感としてひしひしと伝わってくるのが、気づきにとっても大事になるんじゃないでしょうか。小林先生がよく言っている「ヴァイタリティ・アフエクト」です(笑)。つまり理屈で理解するっていうよりは、感触が伝わってくるということが契機になる。

小林 不安の根っこに、根っことまでは言えないかもしれないけれど、あなたが持つてる不安の大きな部分で、ここにはこういうところがあるのでないかということ、面接の中で取り上げてもらうということですよ。それによって気づく、それが自己了解に繋がるといふことなんでしょうか。

山竹 この本の中では自己分析法みたいな感じで書いてますが、実際には、一人ではなかなか難しい。誰か親和的承認を与えてくれそうな人がいるとないでは、もう大違いになるだろうと思いますね。

山竹 親和的承認が与えられればそれでよい、というのではなくて、それを基盤にして、自己のありように気づくことが必要になると思うんです。そうじゃないと、単にその場で、「ああ、この人になら甘えられる」ということになって、外では全然不安は解消されていない。

小林 そうですね。だから、面接という構造の中では、甘えるという体験をすることよりも、今の自分の存在がこれでいいのだということを確認してもらうことが大切なんだと思うんですね。山竹さんが無条件の承認というふうにおっしゃったでしょ。結局それが「甘え」体験の中での最も大切で本質的な部分なのではないかという気がするんですね。サイコセラピーの中で、無条件に自分という存在を認めてもらって、そこに自分の価値を認めてもらったというところがとても意味あることなんだと思っただけです。

集団的承認と自己

山竹 もうひとつ重要なことですね、集団的承認の可能性を広げていくことだと思うんです。普通、歪んだ自己ルールから行動していると、なかなか集団的承認は得られません。それはそうですよね。他人からみれば場違いな行動だし、ときには奇異な行動にも見えるわけですから、その行動を認めてくれることはないでしょう。当然、人間関係にも問題が生じやすくなります。ですから、そうした歪んだ自己ルールや行動を修正することが必要になります。その最初の基盤が親

小林 親和的他者的な存在として誰かと出会い、その中で自分のあるがままの姿を見てもらいながら気づかせてもらえるという、そういう作業ですよ。

山竹 例えばカウンセリングの面接室みたいなところでも、承認されるための防衛行動をとって、偽りの自分を演じ続けていないと怖いわけです。「ありのままの自分」でも受け入れられる、という親和的承認を信じていないのですね。だからカウンセラーのように親和的承認を与える位置にいる人は、その二人だけの空間の中でその鎧を脱げる感じが無いといかないかな、と思うんですよ。

小林 それは確かにあると思いますね。なぜそれを申し上げたかと言いますとね、私は「甘え」という切り口からずっと臨床をやっているものですから。「甘えたくても甘えられない」という人たちをずっと相手していますとね、甘えられなかった人に対する治療は甘えの体験を味わわせることが治療になるかという、実はそうではないんですよ。つまりどういうことかと言うと、面接の中で、私がいわば親和的他者的な存在として、クライエントに対して、あるがままの姿の中でその人の不安の根っこにあるものをこちらが感じ取り、それを素朴に取り上げる。そんなことと関係あるんじゃないかと思うんですね。私流に言えば、「甘え」の問題が根っここの部分にあるんだということに気づけるように援助していくことが治療だろうと思うんです。それと同じようなことを先生のお話を聞いて思いました。

和的承認のなかでの気づきであって、そうした安心感のなかではじめて、行動の歪みに正面から向き合うことができる。そのことを二人で話し合い、自己ルールを修正できれば、集団的承認の可能性を広げていくことができるはずですよ。そうすることで、対人関係もうまくいくようになります。新しく親和的承認の可能性も生まれてくると思うんです。

小林 私は思春期の若者の治療をしていて、次のような変化が起こっていくんだなという経験をしてきたんですね。それは何かと言うと、空虚な承認ゲーム、これに振り回されちゃって、その中でどう振る舞って良いか分からなくなると、混乱し、いろんな反応を起している人がとても多いんですね。そのような場合、ほとんどみんな、親和的承認の問題がその根っこにあるわけですよ。だから、思春期の中学生くらいまでであれば、実際の親子関係の中で、親和的承認の可能性がまだある親子の場合だとね、実際に親子の関係を扱うわけですね。その親子の間で、「甘えたいけど甘えられない」、いわば「甘え」のアンビヴァレンスが必ず認められるんですね。それが非常に強い場合、それ自体を面接の中で取り上げることで、親子の間で引がかかったものが解けていくと、そこで初めて親に分かってもらえたという体験、そして親も子どもになにか触れ合えたという体験をする。そうすると、空虚な承認ゲームから脱することできるわけですよ。それと同時に、そのときにね、とても良くなっていくケースでは、自分の中でやりたいものとか、そういうものを発見し、ある

いは探そうという行動に出る。その中で初めて、いま山竹さんがおっしゃったような、望ましい集団的承認の世界に入っていくことができるんですね。そこで親から離れることができるようになる、そういう感じがするんですね。

山竹 まあ、言わば親和的承認で止まっている人達ですよ。集団的承認の喜びをあまり知らず、親和的承認に執着し続けるので、集団関係の中でもそれを求めようとしがちになる、というところがあるかもしれません。

小林 それはどういうことでしょうか。親和的承認に止まっているというのは。

山竹 無条件に承認される、ということに執着が強いと思うんですよ。例えば、社会に出ても少し上司にちよつと怒られたら、自分の全存在を否定されたみたいになって、絶望したり、激怒したり……。集団的承認というのは個々の行為に対する評価ですから、存在全体が評価されるわけではありません。ですから、今回の仕事の内容は批判されたけど、それで自分の全存在が否定されたわけではないし、そんなに激怒したり絶望するようなことではないはずです。でも、親和的承認の不安が強い人は、集団的承認の場においてもそれを求め、混同してしまう。集団的承認が得られなかったことが、自分の存在そのものの否定に感じられてしまうのです。

コミュニケーション重視の社会の内実

小林 臨床に即して議論したいと思って次にお尋ねするんで

限らず、自閉症でもそうなんだけど、世間一般の目では、明らかに病的な行動だと言われて、それを症状とか障碍として取り上げられているんだけど、ひとつ見方を変えたとそうではなくなることがある。彼らの行動をその動機に焦点を当てて見直すと、彼らの行動はとてよく理解できるようになる。こんなことを言うと、僕もおかしくなってきたのかなとも思うんですけどね(笑)。今日のコミュニケーション重視という社会の流れというのは、コミュニケーションの中でも非常にゆがんだコミュニケーションではないか。そのことが象徴的に示されているような気がするんですよ。

山竹 その通りだと思います。コミュニケーションが重視されるっていうことは、それだけ場の空気を読めない人間が排除される方向に向かっていくっていうことで、そういう人が浮いてしまう時代っていうことですよ。浮いてしまうために、発達障碍という診断をつけられたりする可能性も増えてきている。それはちよつと、この数年の発達障碍パブルを見てると、まあそういう感じがどうしてもしてしまいます。

小林 だから、今日、コミュニケーション重視と言われているけど、それは表面的で非常に薄っぺらなコミュニケーションの話だと思いませんか。私はこの表層的なコミュニケーションの方が意味では病的に見えるわけですね。今はそういう社会になっているような気がするんですね。

山竹 いまのお話を聴いていて思ったんですが、その子は承認よりも自由の方を重視してそういう行動をとっている、と

すが、今日の社会がコミュニケーションを重視する社会で、そのため場の空気を読むということが生活する上で重視されるようになった。アスペルガー(障碍)と言われる人たちは空気が読めないといわれていて、でも私は彼らが空気を読めないというように思わないんですよ。それはどういうことかと言うと、空気を読んで振る舞っていると思っている人たちは、見方を変えたと周囲に過度に同調的な人なんですね。周囲に同調することに過度に敏感になっているともいえるんじゃないか。それは自分というものを押し殺し、自分のない状態につながることもあるのではないか、そんなことを考えるんですね。

私がいま診ているアスペルガーのある二〇代前半の女性なんですけど、大学での行動が場の空気を読めない唐突なものだということの問題となって受診を勧められたんです。面接が深まるにつれて、なぜ彼女が一見すると場の空気が読めないような唐突な行動をしていたか、その動機を次のように話してくれました。ある教員がつまらない講義をしている。周囲のみんなも話がつまらないと思っているのに、何も言わないでおとなしく聞いている。彼女はそういう空気に耐えられないと言っています。自分はつい思ったことをボンボン言ってしまう。それで自分は空気を読めないとと言われるんですね。ある意味では彼女なりの動機ははっきりしているわけですよ。周囲に過度に同調しないため、場の空気を読めないと言われているんだとわかったんですね。アスペルガーに
いふふうを考えるのが良いのかもしれない。過度に同調して承認を得ることより、自分の自由を大事にしているのだ、と……。

小林 だから、当人はそれに迎合してない(笑)。

山竹 そうですね。だからある意味で自己了解できているのかもしれないですね。ご本人に訊いてみないと分からないですけど。

小林 確かに彼女にも問題はあるわけですよ。なぜ彼女はそのような行動に駆り立てられるのか。その根っここの部分で、幼少期の「甘え」体験の欠如とか、精神病的な不安を抱えていたということがあるんですね。でも空気が読めないというふうにしてアスペルガーだの、発達障碍だのと安易にラベリングしてしまう、今の精神科医療のおかしさを感じるんですよ。山竹 聴いていてもなるほどと思います。仰るとおりかもしれませんね。

小林 まだまだ議論したいことがあるのですが、時間も参りましたので、本日の山竹さんの講演をこのへんで終わりにしたいと思います。本日は貴重なお話をありがとうございました。(拍手)

(この企画は、二〇一一年一月二〇日、大正大学にて開催された。)